

不安症状を持つ自閉症スペクトラム障害児への認知行動療法

岡島純子(東京医療学院大学 保健医療学部 准教授)

問題と目的

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) は、社会的コミュニケーションや対人的相互反応の障害、限定された反復的行動、興味、活動の様式という特徴を示す神経発達症群の1つであり (American Psychiatric Association, 2013)、最近の報告では8歳児の約68人に1人という割合で診断される (Centers for Disease Control and Prevention, 2014)。ASD の子どもの70%は、社交不安障害や注意欠陥/多動性障害などの合併症を持ち (Simonoff et al., 2008)、成人の75%は少なくとも1つの精神的問題を抱えていることが明らかにされている (Ghaziuddin et al., 2008)。このように、ASD の子どもや成人に高率に不安やうつなどの深刻な情緒の問題が合併することが示されている。ASD 児の不安軽減については、認知行動療法 (Cognitive Behavior Therapy; CBT) が有効であることがメタアナリシスによって示されており (Sukhodolsky et al., 2013; Ung et al., 2015)、英国のNICE (National Institute for Health and Care Excellence) 臨床ガイドライン170 (National Institute for Health and Care Excellence, 2013) においても、言語および認知能力の条件を満たした場合、自閉症児への集団または個別CBTが推奨されている。わが国では、ケース報告 (石川ら, 2012) や、実施可能性についての検討 (野中ら, 印刷中) した研究はあるが、諸外国のように効果を検討するような系統的な研究は皆無である。そこで、ASD 児に対する不安軽減のための認知行動療法の有効性を検討していくために、①治療プログラムの開発、②治療プログラムの実施可能性・プログラムによる変化を検討することを目的とした。

方法

【時期】4月に対象者の募集を行い、7月～12月にかけて介入を実施する。研究成果は、介入前 (pre) と CBT プログラムと PT プログラムの間 (mid: middle)、事後 (post) におけるアウトカム評価の比較を行った。

【対象者】獨協医科大学越谷病院子どものこころ診療センターを受診し、1) 医師による自閉症スペクトラム障害の診断を受けている、2) IQ70以上の小学3年生～中学3年生、通常学級に在籍している児童とその親を対象とした。親によって研究の趣旨に同意が得られた ASD 児3名とその親を対象とした。

【プログラム内容】先行研究を参考に心理教育、エクスポージャー、認知再構成、リラクゼーションもしくは、ソーシャルシンキングから構成される6セッションが開発された。夏休みに開始し、親訓練を含め7月～12月にかけて行われた。

【評価方法】・対人応答性尺度 SRS (Social Responsiveness Scale; 65項目) ・日本語版 SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire; 25項目) ・日本語版 GHQ-28 (General Health Questionnaire-28) ・日本版 Parenting Stress Index (PSI) ・Spence Children's Anxiety Scale for Parents (SCAS-P) ・Spence Children's Anxiety Scale (SCAS) ・認知の誤り尺度 (Children's Cognitive Error Scale: CCES; 石川・坂野 2003)

結果と考察

プログラムの開発：先行研究を参考に、6セッションから構成される CBT プログラムが開発された。

参加児童の属性：参加したのは、5年生～6年生の女児で、SRSによる自閉スペクトラムの特性もあり、不安症状も高い児童であった。CBT プログラムは実施可能であり、自由記述からは、理解できる内容であると考えられた。

親評定尺度の変化：自閉スペクトラム傾向をみる SRS や、子どもの全般的な精神状態を測定する SDQ において、pre よりも軽減している可能性のあるケースがあった。しかし、子どもの不安を測定する SCAS は、不安得点が増加している可能性があり、親の精神的健康度を測定する GHQ は、軽減した可能性のある親はいたものの、育児ストレスを測定する PSI では、どの参加者も pre の状態から大きな変化はなかった。満足度と自由記述からは、親のプログラムに対する満足度の高さが同われ、自由記述からは、子どもとの関係性について、ポジティブな内容が多かった。

子ども評定尺度の変化：不安症状を自己評定した SCAS で2名、軽減している可能性があり、不安場面に対する認知の歪みを測定する CCES では、全員軽減している可能性が同われた。

この研究の限界と今後の課題

研究2では、プログラムの実施可能性について、検討したが、プログラムの効果については、3例からは言及することができない。今後、参加者 (N数) を増やして、効果を検討していくことが求められる。

(共同研究者：獨協医科大学越谷病院子どものこころ診療センター 中村美奈子・東美穂)